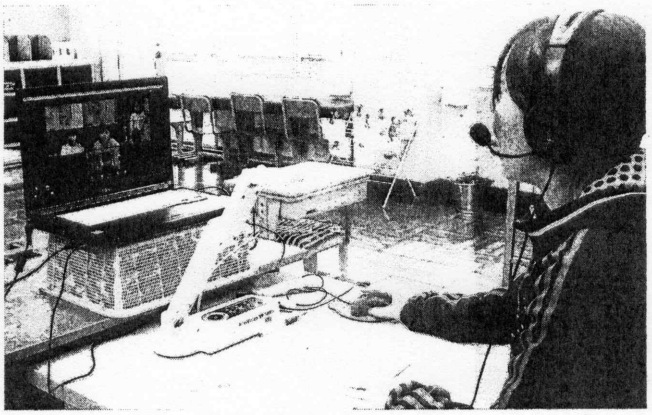
手賀東小でオンライン学習

公立でできる学びの場づくり実践

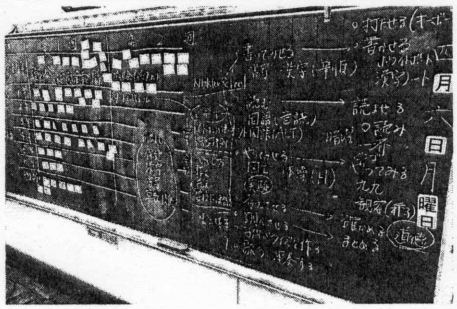
手賀東小学校（児童43名、佐和伸和校長）が15日からオンライン学習をスタートさせた。4月7日の緊急事態宣言で臨時休業が5月6日まで伸びたことを受け、学習の機会と児童の健康観察の手法を模索し導入したもの。併せて、プリントや図書、担任のメッセージなどを個別に届ける「テガニ便」も使い、双方向の意思疎通に努める。佐和校長は臨時の対応にとどめず、「文科省から通常の授業と認められるレベルにするのが目標だ」とし、試行錯誤を続けてブラッシュアップを図っている。



健康観察から学習機会創出まで、きめ細やかに対応

オンライン学習は、5・6年生が15日から、3・4年生が16日から、1・2年生が23日からスタートした。佐和校長が推進していたICT教育環境の充実に加え、マウスコンピューターと内田洋行、レノボジャパンの3事業者からタブレット提供を受け、全児童に配布。佐和校長が1台ずつ、テレビ会議用アプリなどをセットアップ。Wi-Fi環境は保護者に要請し、全世帯が整えたという。

臨時休業の長期化がみえた7日、佐和校長は市教委の関係者と協議し、翌日には同校教職員向けのオンライン学習の研修会を開いた。目的は「学習の機会と生活習慣の見守り」。重視したのは、滞る児童と教師の双方向の交流だ。



手賀東小のオンライン研修の書き込み。教師の熱意が伝わってくる

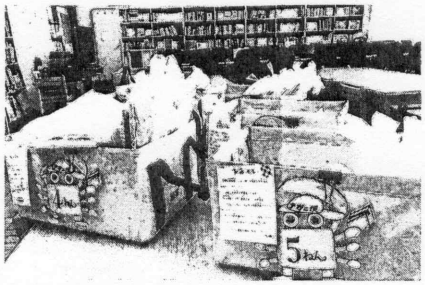
試行錯誤を重ね、学校で使っている書画カメラを教師の顔や教科書の掲示に利用。児童各自と教師はテレビ会議アプリで顔を合わせ、会話もできる。特別支援学級の児童には、個別に担当教諭がアプリを通じてサポートする体制を組んだ。

午前9時に朝の会を行い、午前中に2時限（40分授業×2）を行う。「あくまで学校授業として捉え、原則義務」としている。検温からはじまり、日常生活の模様を共有する。授業は担任の教材を使う、通常の授業と同じだ。午後は、テガニ便で届けたテキストや図書を使った自習にしている。

ICT導入の意義

授業を行う丸山慧教諭は、「やったことがない不安はあったが、子どもたちと顔を合わせる時間は有意義だ」と話す。慣れていない分、今後も指導方法など見直す点は多いと話しつつ、「休業が続く今、学習意欲や習慣をつくる一手として必要な取り組みだ」と前向きだ。

新型コロナウイルスに限らず、災害などで登校が困難になる事例は稀であっても十分におこりうる。命を最優先する事態で、ICT環境の充実は停滞しがちな教育のサポートに大きく寄与する可能性を示した。佐和校長は、「長期化するならば、見送っているPTA総会開催も考えたい。そうした意味でICT活用は、今後の学校経営に重要なポイントになってくる」と話す。



アナログなテガニ便も有効活用

とはいえ、学校規模によってICT環境充実は大きなハードル。オンライン学習は小規模校ならではの取り組みともいえる。河嶌貞教育長は、臨時休業がさらに長期化した場合について、「難しい取り組みだが、タブレットの配布を拡大することも検討していくことになるだろう」と話した。